

沖縄声楽発声研究会

2022年より 日本歌唱芸術協会 本部：沖縄



<https://www.jsaa-okinawa.org/>

会報

第二号

特集 先師に学ぶ教育の原理と本質-その2

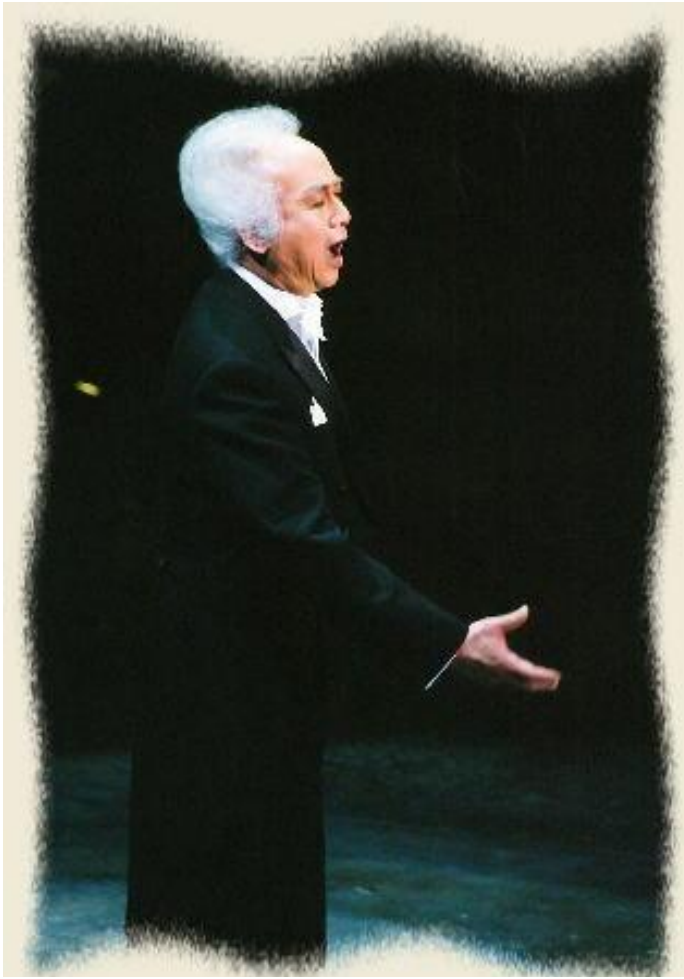
2021年3月

- 私を声楽家に導いた『師』との出会い-----高 丈二 pp. 1
- マエストロはかく語りき[連載-Ⅱ]～ラビージャ先生とスペイン歌曲のキーワード
服部 洋一 pp. 2-4
- 『師』が私に与えた重要課題-----知念 利津子 pp. 4-5
- 定年後の素人歌手活動-----糸数 剛 pp. 6-8
- ドイツ『ミュンヘン音楽・演劇大学』大学院留学時に得たもの--仲本 博貴 pp. 8-10
- 声楽家への軌跡-『師』との創造体験 I-----豊田 喜代美 pp. 10-13



■ 私を声楽家に導いた『師』との出会い

高 丈二 声楽家



オペラ歌手 高 丈二 (テノール)

※公式ホームページから

1938年11月22日神戸市に生まれた私は、高校を卒業するまでずっと神戸で育ちました。幼少の頃から歌が好きで、6、7才の頃にはよく人の前で歌っていたように記憶しています。と云いますのは、私の父は貿易商を営んでいたこともあり、また父自身、客を家に招くことが大好きな性格だということもあって、家には絶えず客がいたので聴衆を集めるのには事欠かなかった訳です。小学校での学芸会、中学、高校での文化祭等、いつも得意になって歌っていました。

このようにして神戸で過ごした18年間は私にとってすばらしい青春時代でした。

1957年私は素晴らしい人に出会います。

当時、東京芸術大学の助教授であられた渡邊高之助先生にお会いし、本格的な歌の勉強を始めることとなります。その渡邊高之助先生にお誘いを受けて赴任したのが、沖縄県立芸術大学で、もう30年ほど前になるでしょうか。

東京芸大声楽科を経てイタリアのミラノに行きますが、ここでもまた素晴らしい方との出会いが待っていました。イタリア音楽界の巨匠・カンポガッリアーニ先生です。

私の人生の中で、このお二人との出会いは、まさに奇跡の出会いと云っても過言ではありません。

こうして私の歌の人生が始まった訳ですが、この年になっても音楽の難しさをひしひしと感じている毎日です。

1968年の5月にイタリアのミラノに渡り、知人の紹介から Ettore Campogalliani 先生にお会い出来、最初のテストを受けることになりました。マントヴァにある先生のお家に伺い、2～3曲ほど歌曲とアリアを歌ったのを覚えています。先生は即座に弟子入りを許可してくださいましたが、もともと私はミラノのコンセルヴァトーリオに入りかけたので、その旨お伝えしましたところ、「それは好都合だ、私もそこで教えているので研究科の入学試験を受けなさい。」と言われ、6月に試験を受けて無事入学することができました。

カンポ先生（短く省略させていただきます）は、素晴らしくピアノがお上手で、それに素晴らしい音楽表現をお持ちなので、先生の伴奏で歌を歌い始めると自然に美しい歌が歌える気分になってくるのは何とも不思議な気持ちでした。そして、いよいよミラノの4年間の留学生活が始まりました。

つづきはまたの機会にお話ししましょう。

乞うご期待。

(本会 顧問)

■ マエストロはかく語りき〜ラビージャ 先生とスペイン歌曲のキーワード ② 服部 洋一 声楽家、博士（音楽）

本編はシリーズ連載の第2回にあたる（第1回は同会報創刊号に掲載）

ラビージャ師は、選曲の天才でもあった。生徒の特性を良く見抜き、その生徒の持つ技量と独自性がさらに生きるであろうという曲を次々と与えてくれるのであった。しかもその与え方には、師ならではの計画性があり、やがて大作品へ取り組ませるために、まずはこれを、そしてそのあとにはこれを、という確固たる教育的段階論を持っておられた。そのようにして育てられると、自分が師となり他の者をスペイン歌曲の世界へと教え導こうとするときに、こういった順番で学ばせることが、ビギナーの生徒にとっては大切なのだという「学習の体系化」が教える側にも構築されるのである。

そしてまた、師が選んで与えてくださるスペイン歌曲は、そのどれもが美しく、素晴らしく、そして個性的な輝きを持ち、かつスペイン歌曲史における重要な位置づけをもつ曲を取捨選択してくださるのであった。

留学というものは期間がおのずと限られている。そのことも師は当然のように踏まえたうえで、その短い期間においても、これらの曲を本場の地で学び取っていけば、そのレパートリーは必ず、その後の歌手人生において、その生徒の歌手性を輝かし続けてくれるに違いないと思うものを選び与えてくれたのである。師が与えてくれた課題は、そして作り上げてくださったレパートリーは、今思うと珠玉の作品ばかりであった。というより、師の解釈にかかると本当にその作品が輝きを放ってくるのである。

話は少々それるが、筆者はスペイン留学前にスペイン歌曲 200 曲近くを準備していったが、そのことも師はととても喜んでくれていたように思う。

何でもかんでも、本場に留学してしまえば、正しい勉強を効率よくできるものとする若者たちがいる。彼らの多くは「日本なんかはいたって、まともな勉強なんてできやしない」「語学だってそうだ。向こうに行ってしまうとこっちで、ちっとも身にならない語学を3年も4年もやらなくたって、向こうへ行って1~2 か月ありゃ、ペラペラにしゃべれるようになるさ」などと考えがちである。しかし、それは間違いである。自分の成長の遅さを環境のせいにして、言い訳をしているに過ぎないのだ。日本にいてもできる勉強をまず猛烈にやり、もうこれ以上は本場に行かなければ解らないというところまで自分を高めてから本場の土を踏めば、想像以上の学びを得ることができることを知るべきである。環境のせいにしてはならない。その環境の中で最大にもがき、自己を錬磨し、問題をはっきりさせていく努力の中で、必ず環境は開けてくるのだ。「足下を掘れ、そこに泉あり」との格言があるではないか。

さて、師は、歴史的大家の作品であっても、その生徒の演奏に適さない、或は勉強しても、演奏プログラムとして、そもそも価値を持つようにはならないだろうと判断したものは、「それは勉強してもつまらないよ。取り上げる必要はない。それよりヨーイチ、こちらをやってみたらどうだ？」と提案してくださった。師の弟子を思う心は、ラビージャ門下となって、1 か月もたたないうちに筆者にも熱く伝わった。しかしそれとは裏腹に時々、「えっ?!」と思うこともあった。グラナドスの「トナディージャス Tonadillas」は、同作曲家の「愛の歌曲集 Canciones amatorias」と並んで、名ツィクルス中の名作であり、日本でも女性歌手によってよく歌われ、これは、ラビージャ先生に歌いまわしをしっかりと教えてもらおうと、ある日レッスンに持って行ったのだが、師は「ヨーイチ、これはやらん、これを男が歌うと想像しただけで気色悪くなる」といって教えてくれないのだ。師いわく「これは女性歌手だけのレパートリー

だよ」と。筆者は、「それは承知の上、やがて日本で女性歌手に教えなければならなくなったときのために習っておきたいのです。」と説明しても、師は、「いやだやらん」の一点張り。その中にただ1曲だけ男が歌ってもいい曲があるから、それだけはみてやろうというわけで「忘れられたマホ *El majo olvidado*」だけはみてくださったのである。そして師は、「そのほかのマハの歌の歌い方を知りたいければ、その曲をさらに来る女性歌手がいるときは、お前に連絡するから見学に来たらいい。」と勧めてくれた。後日このことは叶い、ラビージャ先生が教えるマハとマホの物語の演奏解釈にふれさせていだいたのだったが、その時の、まさしくゴヤの絵画を彷彿とさせ、彼の生きた時代をピアノと歌とで再現していく魔術に、時がたつのも忘れて食い入るように見学させていただいたものだ。

調性についても、師は自由自在に、しかも瞬時にして移調奏をして、生徒の声の特色が最も映える調を探してくださった。その一方で、ピアニストとして、「こういう調にしてしまうと打鍵にとっても無理な運指が生ずるというような調は絶対に選ばないようにするべきだよ」とか、「作曲者の意図からかけ離れた響きに替わってしまうような移調は絶対に避けるように」などの細かい指示も欠かさなかった。

スペイン留学が叶うまでに、本当にお世話になった方が何人もおられる。少し話はそれるが、一人の声楽家が成長していくには、本当に人との出会い、そしてその出会いを自ら掴んでいくことが大切であると筆者は感じているので、少しその話をさせてもらいたい。

師との出会いは勿論、筆者自身が東京藝大時代にスペインの歌と音楽を自分の専門にしたいと思い立ったことがすべての始まりではあるが、師への橋渡しをしてくださった、今でも心からの感謝を忘れてはならない人がある。それは、筆者よりも数年前にスペインへ渡り、師のもとでスペイン歌曲の薫陶を受け、帰国した

ばかりだったメゾ・ソプラノ歌手の孤島和世さんである。孤島さんと知り合えたのは、フラメンコ雑誌 *Paseo* に掲載された彼女の帰国リサイタルの記事が縁である。

それは当時日本（1980年代半ば）ではなかなか聞くことのできない、全編スペインものによるものだった。その当時は、スペインものを勉強したくても、今よりもっと楽譜や楽書が入手しにくかった時代である。東京藝大の博士課程に「スペイン歌曲を演奏し研究します！」と啖呵を切って進学したものの、自分でカタログを見て輸入した楽譜資料は手元にはあるにはあったが、その数は乏しく、楽譜が手に入ったとしても、さて一体何から手をつけて行けば、必ずスペイン歌曲の山に分けいって行くことができるのか、そしてその先、山の頂点を目指していけるのかさえ見当もつかず、文字通り五里霧中もよいところだった。*Paseo* でみた孤島さんのリサイタルはすでに終わってしまっていたのだったが、同誌の編集局から、ご本人の許諾を得て入手した連絡先に電話をかけ、孤島さんのご自宅にうかがわせていただいたのだった。彼女の家には、日本ではなかなか手に入らない楽譜があり、それらを彼女は惜しみなく筆者に分けてくださり、スペイン留学のこと、そしてラビージャ先生の話聞くにつけ、スペインに行きたい、ジェシー・ノーマンやカルロ・ベルゴンツィが共演を望んだ世界的アコンパニスト、テレーサ・ベルガンサの芸術をあそこまで磨き上げた最高のスパルティート、フェリクス・ラビージャ先生というスペイン屈指のピアニストに、直接スペイン歌曲のレッスンを受けたいという願いがふつふつと湧き、留学の準備に取り掛かったのだった。

そしてもう一人。筆者はスペイン語を青山学院大学英米文学科在学時代に北村光世先生のもとで、みっちり教わっていたので、D2(博士課程2年次)の時に受けたスペイン大使館の留学生試験には一発で受かることができ、D3の秋からスペイン政府の給費留学生として渡西する

こととなった。この北村光世先生という方は、今や食文化研究家・ハーブ研究家として世界中を飛び回っておられる方だが、アメリカ留学中「外国人がスペイン語を効率よく学ぶ方法」をテーマとする研究論文で学位を取られた方で、この先生に筆者は1年生の秋に「スペインの歌を専門とする声楽家になりたい。そのためにスペインに留学したい。」という自分の将来の夢をお話したところ、「それなら毎日でもいいから研究室に来て3~4年生のゼミに入って会話の練習をしましょう!」とあってくださり、そのおかげで、3年次になる頃には、まさに北村式語学学習システムの効果で、日常会話には事欠かないくらいスペイン語が話せるようになっていたのである。(同シリーズ③に続く)

(本会 理事)



スペイン・バロセローナの街並み:どこを見ても美しい。街全体が芸術の魔法をかけられかのたようだ。

■『師』が私に与えた重要課題

知念 利津子 声楽家

日本最南端の沖縄県立芸術大学に、国内外から演奏経験豊かな指導陣が集まり、少人数制ならではの教育環境を十分に活かした指導の下、いつしかこの南の島から世界へ飛び立つことを夢見て過ごした学生時代は、思い返すとなんとも贅沢であり、大変幸せな環境で学んでいたのだろうか。もしも、タイムマシンが存在するのならば、その当時の自分に「教授陣からもっと声楽技術や思想・音楽性を盗める機会は無かったのか」と説教してやりたい。

当時赴任していらした先生方は、クラスの垣根を越え、専攻の学生達を音楽家として、はたまた音楽教育者としての将来を見据え、学生個々を如何に成長させることができるのか、というテーマで意見交換が激しかったようだ。それ故に、授業担当されたどの先生方からも我々学生はありがたいご指導を頂くことができた。もはや家族化するほどの近い距離間での指導は、先生方も次第に熱が入り、怒号が飛び交うこともしばしば。今では大変珍しい光景となってしまったが、社会や現場へ出る厳しさを若いうちに教育されたのは、今の私の音楽活動において大変役立っている。

この小さな島でマイペースに音楽について、発声について課題研究を進めていた大学院時代の夏、同じく声楽研究をする同期が師事する高丈二先生の東京邸宅にて、門下生たちによる勉強会があるとの情報を得た。私は偶然にも上京するスケジュールが重なったため、聴講させてほしいと先生にお伺いを立て、聴講させていただけることになった。

いざ東京の勉強会へ。期待で胸の高鳴りを感じながら会場へ向かった。勉強会会場では、既に多くの声楽家とその卵たちが会の準備をしていた。そこに集まる面々とは、東京藝術大学の卒業生が中心となり、多くの卒業生は輝かしいコンクールキャリアや留学経験をもち、数々

の舞台を踏むプロの歌手達や現役の藝大生らが年一回集まり行われる勉強会であった。勉強会が始まる前に「彼女たちは沖縄からこの勉強会へ聴講をしに来ました。」と先生から皆に紹介された。

ガチガチに緊張していた友人の隣で、私はこれからはじまる刺激ある学びの場に興奮していた。

勉強会は学部1年生から発表され、演奏が終わる度に教授から演奏を終えた学生へ講評を述べられて会が進行した。学年が上がるごとに声楽技術の向上が目覚ましく、全ての音をとてども丁寧に研究している姿勢に感心し、4年生の演奏を聞いた時には流石に驚きを隠せなかった。同年代の彼らが研究する姿勢は、既に確固たるプロ意識を持ちその場に挑んでいたのだ。大学院生ともなれば明日にでも演奏活動できるのではないか、と思うほど「音楽を魅せる」事に重点をおいて研究がされていた。ひと通り学生達の演奏が終わると、「では、卒業生の皆さん演奏どうぞ」と先生からの声掛けで、留学帰りのアグレッシブな卒業生の演奏や、国内で華やかな演奏活動をする歌手たちがさらっと歌いだしたのだ。それはまるで夢のようなコンサートが始まったかのような感覚だった、こんな短時間で多くの刺激を滝の様に浴び、口があんぐりと開いていた私にこの後想定外の事態が起こった。

「今日は沖縄から大学院生がお勉強に来られたので、一曲歌っていただきましょう」。これまで楽しく興奮しながら聞いていた我々にはまるで青天の霹靂だった。同期の子はさぞかし不憫だなあ、と思いながらも横で応援をしていたら、「喉の不調」という理由で演奏辞退宣言をしたのである。「そりゃそうだ、こんな環境で歌わされるのは公開処刑同然だよ、分かるよ、その気持ち」。彼女に同情していたら、まさかの提案がされたのだ。「では知念さん。歌ってみましょうか」。流石に断られる雰囲気はそこにはなかった。絞首台の上のぼる死刑囚の気持ち

を覚えながら発声練習もなしにオペラアリアを一曲演奏した。出来は安易に想像できるであろう、散々な演奏だった。穴があったら入りたい、その言葉通りの状況下で先生からひと言、「沖縄の学生は皆いい声をしている、しかし勉強の仕方がわからない。」と皆の前で講評をされた。恥ずかしさと悔しさでそのあとの懇親会は記憶にない。

勉強会が終わり、帰路につきながら講評された言葉を反芻していた。「勉強の仕方がわからないとは具体的に何を指摘されたのだろうか」。

考えれば考えるほど恥ずかしい思いをしたという悔しさが溢れてきた。南の島でのんびり暮らしながら歌を学んでいることが如何に生ぬるい事なのか、まさに井の中の蛙になっていたのだと気付かされた瞬間であった。

このカルチャーショックを覚えた勉強会から沖縄へ戻り、目標を定める事、自分の音楽人生設計について真剣に考えるようになった。大学院修了後、海外留学を経て帰国した私の中には、あの時先生がおっしゃった言葉の真意がどうしても知りたい、という欲求がおこり、後に門を叩くこととなる。先生のレッスンは手取り足取り発声メソッドを叩き込むものではなく、レッスンを受ける側の感性と細かいニュアンスを盗む集中力が無ければ成立しない学びの場で、例えるならば目の前に食材を置かれ、調理したものを食べてもらい評価されるようなレッスンであった。先生の親心ある指導法に気付いた時、そこには沢山の学びに溢れていた。

今では先生に御指導を仰ぐ機会が無くなってしまったが、また新たな段階の壁と闘いながらもいつの日かまた聞いていただけることを願い、日々歌と向き合っている。師の前では幾つになっても学生のままだらう。私にとって一生飛び越えることが出来ない大きな存在なのである。

(本会 幹事)



ドイツにて:ドイツの『フィリップ・マールブルク大学』
交換留学プログラム生の時の筆者

■ 定年後の素人歌手活動

糸数 剛 教育家, 歌手

40年ちかく国語教師を勤めた。60歳の定年退職後は、素人なりにもっぱら音楽活動を続けてきた。今では自ら音楽家と名乗るようになってきている。とは言っても、いきなり音楽にのめり込んだわけではなく、中学校1年の時に吹奏楽部に入った時以来ずっと音楽に親しんできた。

歌を歌うこともずっと好きで、中学生の時、吹奏楽部が沖縄代表として九州のコンクールに遠征したときには、船中で大きな声で歌った。変声期だったにもかかわらず声を枯らしてまでも歌っていた。顧問の先生から「変声期ワラバー（童・子供）」というあだ名を頂戴した。

中学・高校の時代は吹奏楽に熱中した。そんな中、高校2年生の時、音楽鑑賞の時間にイタリアのオペラ歌手ステファニーノのレコードを聴かされた。忘れもしない赤いLPレコードだった。その時、人間にこんな声が出せるのかと電撃が走り、それ以来声楽のとりこになった。大学時代は、声が大きくなるだろうと詩吟クラ

ブに入ったり、また、やはり歌が好きなので、グリークラブにも所属した。

教職についてからは、沖縄男声合唱団に所属し、45年ほどになる。自己流で、今考えると地声で叫んでいたのだから、沖縄男声合唱団にはハーモニーこわしでずいぶん迷惑をかけた。現在はそうでもないと自負しているのだが、団員にはこれまでの因縁が大きいようで、今でも皮肉を込めて「沖縄男声の3大テナー」の一人だと揶揄されている。わたしは自嘲して「3大テナーバカ」の一人だとうそぶいている。そして、「これからは『テナーリコウ（利口）』になります。」と言い訳している。

さて、定年までは仕事に追われ、趣味活動は合唱活動が中心だった。それでも結構忙しかった。固定的には沖縄男声合唱団に所属し、不定期でおこなわれる第九演奏会、メサイヤ演奏会、モーツァルトレクイエム演奏会、オペラの合唱等への参加は今でも常連である。しかし、人前で独唱することまでは手が回らなかった。独唱したい気持ちはやまなかった。定年して余裕ができれば、ぜひ独唱活動もしたいと願っていた。

2010年の定年と同時に、待ってましたと、4月11日、沖縄県立博物館・美術館講堂で「糸数剛定年退職記念歌手活動スタートリサイタル」を催した。満席だった。張り切って7曲ほどアンコールを準備していたが、4曲目ほどで女房から「空気が読めない」と止められた。伴奏者はまだあると思って舞台に出ようとしたのを止められたので笑いを誘った。

このリサイタルをもって、これから歌手活動を始めますという公言をしたわけである。「人は言うとおりになる」という格言があるが、まさにその通りだと思う。自分の経験を通して実感している。

その後の定年後のわたしの歌手活動は自分で言うのもなんだが、すこぶる充実している。中学生の意見発表大会のアトラクションとして歌ったり、ホテルのチャペルでコンサートをしたり、声楽同好会を結成して立派なホール

(パレット市民劇場・シュガーホール・県立芸術大学奏楽堂)で歌ったり、ワンボイスのリードボーカルとしてマイクの前で歌ったり、モノレールで「ボジョレヌーボーを楽しむ会」のゲストとして歌ったり、老人ホーム主催の食事会のゲストとして歌ったり、デイケアのボランティアで歌ったりと、歌手活動を満喫している。

歌に限らず、ギターを用いての音楽活動も充実している。ギターも独習だが、定年後に人前で弾く機会が多くなってだんだん上達している。

わたしの現在の音楽活動を挙げると次の通り。

- ・沖縄男声合唱団団員

沖縄男声合唱団では男声コーラスの重厚なハーモニーをこわさないようにトップテナーとしてピュアな声を出せるように努力している。

- ・ワンボイス団員

65歳以上のおじいおばあのロックンロールグループで、若者の歌やゴスペルがレパートリー。主な演奏形態はリードボーカルが3人、マイクの前で歌い、他はバックコーラス。曲によってリードボーカルを交替する。何曲かリードボーカルをさせていただいている。

- ・楽宴21会員

わたしと同年の那覇高等学校出身者で組織する音楽グループ。ちなみにわたしだけは首里高等学校出身。出身中学校が那覇中学校で共通しているので親しく活動している。チェンバロを中心として器楽曲や声楽曲を演奏するグループ。そこで歌やギターを弾かせてもらっている。毎年発表会を行っている。

- ・ぎのわん歌謡友の会会員

カラオケグループ。毎年宜野湾市民会館大ホールで発表会を行う。5年に一度は沖縄で一番規模の大きいコンベンションセンター劇場棟で発表会をするというので入会したが、コロナ禍のせいで、まだコンベンションセンターでは独唱できてない。

- ・ギターでうたごえ in ほしぞら 講師

ほしぞら公民館で毎週行っているうたごえ活動。20名ほどの参加者で、わたしのギター伴奏で斉唱をする。レパートリーは童謡から歌曲まで200曲を超える。順繰りに好きな歌をリクエストして斉唱する。

- ・ギター伴奏による声楽の会主宰

10名ほどの会員で、わたしのギター伴奏で声楽曲を独唱する会。日本歌曲からオペリアリアまで歌う。ピアノ譜そのままではとてもギターで弾けないので、音を間引いてギター用に編曲して伴奏する。オペリアリアでも伴奏する。

- ・越智記念ギターアンサンブル代表

首里のアルテビルで活動するギター合奏クラブ。創始者でありアルテビルのオーナーでもあった越智史郎さんが亡くなられたので、名称を越智記念ギターアンサンブルとした。主にわたしの編曲でギター合奏を楽しんでいる。

- ・アルテファクトリーの会会長

首里のアルテビルで月1回催される、何でもありのライブ演奏会。ピアノ演奏あり、ギター演奏あり、弾き語りあり、クラシックあり、ポピュラーあり、三線あり、オカリーナ、ウクレレありの素人中心の演奏会。これもアルテビルのオーナーの越智氏が会長だったが、亡き後わたしにお鉢が回ってきた。

- ・韓琉友好声楽同好会主宰

ピアノ伴奏による独唱の会。この前身は声楽同好会アルテ。この声楽同好会の活動をネットで知った韓国の音楽家キム・フンオンさんからオファーがあり、交流することになり、改めて韓琉友好声楽同好会を結成した。2020年は韓国で交流演奏会を実施する予定だったが、直前に新型コロナが発生し、中断したままになっている。

- ・『通所リハビリテーションそよ風』及び『デイサービスよつ葉の里』の各ボランティア演奏者

それぞれ月1回実施しているデイサービスで

のボランティア演奏会。手作りの歌集をお配りし、ギター伴奏でうたごえを楽しんでいただいている。

・五郎部俊朗氏の沖縄マネージャー

五郎部氏が沖縄県立芸術大学に赴任する前からファンだったわたしは、沖縄におけるマネージャーをかってでてコンサート等の世話をおこなっている。

・沖縄声楽発声研究会相談役

声楽に興味があり、日本声楽発声学会沖縄支部が発足した当初から会員になり、2016年には事務局長を勤めることになった。わたしが事務局長になった年に日本声楽発声学会沖縄支部から沖縄声楽発声研究会に名称が変更になった。2020年、70歳の定年制に則り事務局長を辞し、その後相談役として関わらせていただいている。

以上のように音楽への情熱は止まらない。

「素人声楽同好会」を主宰しているとき、発表会のチラシに「歌への情熱は誰にも止められない！」というキャッチフレーズを載せた。すると、会員の一人の旦那様がその横に吹き出しをつけて「家族は迷惑しています！」と書き込んだというエピソードがある。

わたしに限らず周りの素人声楽歌手のみなさんまるで女学生のように熱心に声楽レッスンに通っている。ともに生涯現役で歌っていきたい。

(本会 相談役)



ギター伴奏の筆者と「ギターでうたごえ」のメンバー、首里城チャリティコンサート、パレットくもじ広場にて

■ ドイツ『ミュンヘン音楽・演劇大学』 大学院留学時に得たもの

仲本 博貴 声楽家

2006年3月、私は6年間に渡る沖縄県立芸術大学での学びを終え、かねてより切望していた憧れの地ドイツへと旅立った。とはいえ、小学校から大学院まで徒歩で通えた生活環境から、言葉や文化の異なる異郷での生活は容易ではなく困難の連続であった。

渡独後、間もなくして、ミュンヘンの語学学校へ通い始めたが、欧米のクラスメート達は理解の成熟度よりも積極的に会話を試みる者が多かった。私はそれを横目に、文法や単語を熟知しないと会話はできないと考え、ノートをまとめることに徹していた。ところが、スーパーで買い物をした際に、「Hallo (こんにちは)」という言葉でさえ、発するまでに時間がかかってしまう状態に気がついた。そのとき、受験に必要な応答には到底間に合わないと思えた。新参者として訪れた異郷の地には友人もなく、限られた環境の下で、会話ができる語学学校の授業を活かそうと、それからは欧米の人達同様に積極的に発言するように努めた。

当時、ドイツの音楽大学では学費がかからず、多くの外国人留学生が在学を希望していた。特にアジア人留学生の比率は高く、演奏の技術もさることながら、外国人としての会話によるコミュニケーション能力は非常に重要であった。

最終的に私は沖縄県人材育成財団の奨学生としてミュンヘン音楽・演劇大学へ入学することができた。約1年前に沖縄県で行われる人材育成財団の審査試験に合格し、奨学生としての権利を獲得した状態であった。しかし奨学金はドイツの大学に合格後、支給されるという条件である。つまり、大学に受からないことには奨学生としての権利を失ってしまう。そのため大合格を目指し緊張した毎日を過ごしていた。

ドイツでは、5月、6月が受験シーズンとなっており（前期、後期日程で、半年に一度受験できる学校もある）、とにかく数打つつもりで6校に出願届を提出した。出願した6校の中で一番早い試験がミュンヘンだったが、無事合格することができた。師事する先生との相性で大学を決めることが一般的であったが、ミュンヘンには、バイエルン州立歌劇場、世界的にも有名なコンサートホール、プロオーケストラが多数ある等、一流の音楽を直に聴き、感じるができる豊かな環境があった。その音楽環境が、私には決定打となり、10月よりミュンヘン音楽・演劇大学大学院生として研鑽を積むこととなった。

大学生生活

沖縄県立芸術大学在学中は、「週一回の個人レッスン」「オペラ」「重唱」、この三つが声楽の授業では重要なカリキュラムであった。ところが、ミュンヘン音大では、「週二回の個人レッスン」「ドイツ歌曲」「ロシア歌曲」「オペラ」「オラトリオ」「コレペティートル」と、声楽関連の授業による一週間のスケジュールの密度は濃く、新曲の譜読みにてんてこ舞いの毎日であった。特に個人レッスンでは、約三曲程度を毎回持っていくことが必須で、在学当時は、とにかく譜読みに追われていた。ミュンヘン音大での恩師、フリーダー・ラング教授はとても愉快で楽観的な先生だった。曲数をこなすのはとにかく大変だったが、レッスンはいつも穏やかな雰囲気で行われた…（リラックスし過ぎて先生はよく夢の中におられたのはさておき…）。

先生は特に宗教音楽を専門にキャリアを積み、授業のない週末は頻りにテノールのソリストとして演奏会に出演していた。そのおかげで、先生は度々私にバスソロを任せてくださり、早朝より遠くの教会まで二人で遠征することも度々あった。先生の運転する車の中で、ケラケラと笑いながら会話が弾むと、先生がふと我

に振り返り「俺はテノールだ。だからもうおしゃべりはここまでだ！分かったな?!」と会話をやめる。しかし、二分も経ないうちに先生が会話の口火を切り、会話が弾んだところでまた我に振り返り「俺はテノールだ！わかるな?!声をセーブしないとイケない!!」そして…ということを繰り返した道中でのやり取りは、今でもついつい笑みがこぼれてしまう楽しい思い出である。

留学時代、多くの素晴らしい声と出会うことが出来た。特に、同じアジア人である韓国からの留学生は、素晴らしい声の持ち主が多く、力強い高音、鋼のような響き、アクロバティックな難曲を、いとも簡単にこなしていく彼らの歌声に、憧れや劣等感すら感じていた。隣の芝生が青々と見えていた私に、先生は「素晴らしい音楽性や表現能力よりも大きな声を出したいのか？自発的に表現する意思、具現化する能力はそれより優れているのか？」とおっしゃった。そのときは、先生のお話をすぐに理解することはできなかったが、後に先生が語られた真意とも考えられる出来事を私は経験した。

ドイツでの初演奏

ミュンヘンの冬は、温度計が連日氷点下を表示し、酷い日はマイナス10度以下になる極寒であった。室内はとても暖かいが、暖房による乾燥で起床時はいつも喉が痛く、慣れない雪道で疲れはなかなか取れず、コンディションが良好とは言えない日々だった。そんな状況下で、ある日、ドイツで初めての演奏会の日を迎えた。

その日はシューベルトの歌曲を五曲演奏する予定だったが、調子が良くないと思っている心境も相まって、ドイツでシューベルトの作品を歌うことにとっても怖さを感じていた。舞台上上がる少し前に、ようやくありのままを受け入れ（単純に俎板の鯉状態だったかもしれないが…）、声の状態に抗わず演奏しようと決心しピアノの前に立った。

しかし、今まで見たことのない金色の髪や茶色の髪の頭、青い目や白い肌のお客さんに一瞬おののいたのと同時に、前奏が始まった。歌い出しでやはり声の状態が良くないのが分かったが、いつも以上に丁寧にテキストをなぞるような発音を心がけ、強弱のニュアンスに気をつけながら演奏を終えた。

兎にも角にもお辞儀をしたあと逃げるように帰りたいという気持ちを抑えゆっくり顔を上げた。すると、金髪や茶髪の頭が先ほどより高い位置まで上がり、お客さんの笑顔がはっきり見えた。立ち上がって声援を送ってくれる人、大きな拍手を送ってくれる人たちがいた。歌には言葉があり言葉は生きている。ドイツの観客にとっては、活きた言葉であるからこそ、丁寧に発音すれば音楽が言葉を助けて、より良い表現となったのではないか。その時の体験はラング先生の言葉の意味を痛感させる出来事であった。

このドイツ・ミュンヘン留学時の聴衆のスタンディングオーバーションは、音楽に人種、国境などの差異は存在しないということを教えてくれた。

今回は留学先での出来事を書いてきたが、沖縄県立芸術大学での6年間、ウーヴェ・ハイルマン教授の元で傾倒したドイツ音楽の表現方法、発声、発音、これらの学びの賜物でこのような素晴らしい体験をすることができた。

また、ラング先生は今までの学びを理解してくださり、これらを長所と捉え、そのまま伸ばそうとしてくれた。

二人の師に感謝しながら、これからも更に良い音楽を表現して行きたいと思う。

(本会 理事)



ドイツ・ミュンヘン音楽・演劇大学大学院生の筆者。
『ミュンヘン音楽・演劇大学』校舎の前で。

■ 声楽家への軌跡-『師』との創造体験 I

豊田 喜代美 声楽家, 博士 (知識科学)

声楽家への軌跡は、全て、人と出会い、その人の全人格から学ぶことによって作られていったと思っている。思い出せば思い出すほどに感謝の気持ちが溢れてくる。

私は23才で東京二期会オペラ公演でデビューし、26才でドイツのケルン音楽・演劇大学大学院に留学し、33才で『サントリー音楽賞』受賞の栄誉を頂き、オペラ公演やオーケストラ定期演奏会ソリストとして活躍の機会を多く与えられ、いくつかのオーケストラ演奏は後世に残す記念演奏としてCD、DVDに収められており、NHK・FM番組『レジェンド』で取り上げられて放送されるという身に余る幸せな軌跡を歩ませて頂いてきたと思っている。

オランダ交響楽団定期演奏会「モーツァルト/モテット」全3回演奏で聴衆のスタンディングオーバーションを受けた体験からは『違い』を問題としない音楽の力を学んだ。社会的に声楽家と認められるようになってから35年以

上になり…育てて下さった出合いの体験を記すことで感謝を表すことができ、その成果を皆様と分かち合うことができたなら幸いに思う。

この軌跡の初穂は生まれたての時から母親の歌う子守歌だと思っている。優しくて情感豊かな母の歌を私はいつも待っていたように思う。そして母との斉唱と二重唱、家族全員で歌う体験で歌が大好きだったことが声楽家への軌跡の入り口である。5才でピアノを習ったがピアノが無かったので紙ピアノで母と勉強し、ピアノの在る近所のご家庭で練習させて頂いた。感謝している。家にピアノが到着した時のことは今でも覚えている。5才からはピアノ演奏学習に集中し、18才から萩谷納、柴田睦陸、柴田喜代子各師の許で声楽基礎訓練を開始した。(このかけがいのない体験は前号で記させて頂いた)

大学卒業時に大学代表として読売新聞主催の新人演奏会に出演し初めて東京文化会館大ホールで歌った時の体験は今も鮮明に覚えている。独特のホールの匂い、その響きの心地よさに大きな安心感を覚えた。演奏曲はドニゼッティ作曲《Linda di Chamounix/シャモニーのリンダ》からアリア〈O luce di quest' anima/私の心の光〉とプーランク作曲の歌曲〈C/セ〉であった。ピアニストは同学年の星野明子さんで、彼女はドイツ・シュトゥットガルト音大歌曲伴奏科に留学し研鑽を積み、助手として指導と演奏を行い、帰国後は国立音大の歌曲伴奏教授として、後進の指導にもあたった。大学生時の星野さんとの出合いでドイツ音大歌曲伴奏科の存在を知り、その後の歌曲演奏に対する正しい姿勢を持つことができたと思っている。

私は大学卒業年にそのまま二期会研究生になり、演技、モダンダンス、日本舞踊などの舞台実習研修を受けた。研究生時、二期会公演「タンホイザー」お小姓役で舞台プロデビューしてから今年で45年になる。研究生時には、他にフィガロの結婚の花娘、魔笛の童子を歌い、大学での学びの余韻が残っている20才代前半

にプロフェッショナルなオペラ舞台経験を積めたことを幸いに思う。素直に体験が身につけていく実感があつた。

26才の誕生日後直ぐにドビュッシー作曲「ペレアスとメリザンド/東京オペラプロデュース公演」で初めての主役をいただいた。指揮は若杉弘氏、演出は佐藤信氏だった。日本語翻訳は訳者によって非常に厳しく精査され、稽古中に歌いながら違和感のある部分を即修正するなど、翻訳者・出演者・指揮者・演出家の全員で徹底的に努めた。

その結果、「フランス語のニュアンスが生きた日本語訳」との複数の新聞講評を頂き、努力は報われる、と思う体験になった。メリザンドとペレアスは新人が歌い、舞台写真と共に掲載された新聞の講評記事は母のおかげで今も保存されている。この写真を見るとその時の研修体験が蘇り、気が引き締まる思いがする。

メリザンドは、それまでのモーツァルトの役柄に無いミステリアスな役で、気鋭の演出家・佐藤信氏はリハーサル中、険しい表情を崩さずに、容赦のない厳しい指導で鍛えて下さった。当時はただただ指導に応えるのに夢中で自分の身内から湧き上がってくるような動きの感覚はなく、佐藤氏の演出についていくのに必死であった。指揮の若杉弘氏はコレペティとしても楽譜の正確さを徹底して指導なさり、メリザンドを演ずる私が演出家からの指示に応えようとするのを、深く見守っておられるのを感じていた。そんな幸せな(苦しく)オペラ歌手として初めての主役の機会であったが、公演中、出づっぱりのメリザンドに体力を使い果たし、後半になって舞台袖に引っ込んでの待機中には舞台袖のソファーで横になっていた。最後までメリザンドをしっかりとやりきることができたことを神に感謝した。この体験はプロのオペラ歌手としての階段を一段登らせてくれたと思っている。

メリザンドを歌った2か月後にドイツに留学し、ケルン音楽・演劇大学マスタークラス

E.Bosenius 教授の許で研修を行なった。「プロフェッショナルになる能力は一からマキシムまで『素直』な性格です」と教えて下さった。

入学した年の秋にケルン歌劇場協力の衣装とメイクによる大学主催の本格的オペラ抜粋公演がケルン音大のザールで催され、主要な相手役は既に歌劇場専属の歌手が助演し、私はホフマン物語のアントニアを歌い演じた。4月に入学して3か月後の7、8月の夏休みには、このオペラ研修がミュンヘンのゲルノート氏（演出家）のスタジオで合宿形式で行われた。

ホフマン役は当時既に歌劇場でホフマン役を歌っている歌手で、素晴らしい演技と歌唱で支えてくれた。ケルン音大とボゼニウス先生、演出のゲルノート先生故に与えられた貴重な体験であった。大学主催公演にはドイツ国内外の Agentur（マネジメント）が来ており即契約交渉になる学生もいた。私はデュッセルドルフの Agentur パーシュから氏からお話を頂き、歌劇場の Vorsingen（オーディション）を待っていた。11月にはモーツァルト・レクイエムのソロの機会を頂いた。

同じ頃に、東京二期会からのフィガロの結婚/ケルビーノ、東京オペラプロデュースからのセヴィラの理髪師/ロジーナのオファーがあった。帰国か在独か…人生の中でこんなに悩んだ事は無いと思えるほど、精神状態が危なくなるほど悩んだ。幻聴まで聞こえるようになり、これは良くないと思い、住んでいたカトリック教会女子寮の星出さんの部屋に行き、一緒に過ごした。

彼女は日本から送られてきた梅酒を温めてふるまってくれ、私は自分の部屋に戻った後、数か月ぶりに良く眠れた。そして目覚めた朝には「帰国しよう！」と心が決まっていたので、日本に連絡した。この友人の存在は天の恵みだったと感謝している。

その時、同時期に留学していた指揮者志望（後にプロの指揮者）の K 君から「マネジメントが決まっている状況の中で帰国するのか？

いくじなし！」と言われた。その時は、そのように考える人もいるのかと思ったが、5年後にサントリー音楽賞を受賞して、記念演奏会準備のトレーニングのために渡独した時には「喜代美さんの帰国は正しかったと思う」と言われた。

帰国して最初のオペラ公演は、《セヴィラの理髪師/ロジーナ/東京オペラプロデュース》と《フィガロの結婚/ケルビーノ/東京二期会》で、フィガロの結婚の演出家は鈴木敬介氏であった。鈴木先生は、二期会研究生時の最初のタンホイザーのお小姓、魔笛の童子、フィガロの結婚の花娘の演出全てをなさっておられた。ケルビーノをはじめ、その後の魔笛/パミーナ、魔弾の射手/アガーテ、セヴィリアの理髪師/ロジーナ、イドメネオ/イリア、コジ・ファン・トゥッテ/デスピーナ、フィオルディリージ、夕鶴/つう他の演出の際に、それは厳しく妥協無く指導を受け、公演を重ねる度に自分の成長と反省を繰り返し感じてきた。

二期会オペラの多くを演出なさっていた鈴木敬介氏はドイツで長く研鑽を積み、こけら落としにベルリン・ドイツ・オペラを招聘した東京日生劇場に深く関わっていらっしやった。

鈴木敬介氏は、ただ形だけになっている演技を全て見抜かれるので、リハーサルは一瞬たりとも気が抜けない必死の時間であった。演出中に鈴木敬介先生が頭を掻きむしる様子を何度見たかしのれない。その度に心臓が破裂しそうになったが、OKが出るまで、思い切って！の演技に挑戦し続けた。

リハーサルの帰路、小田急線で帰宅途中、下北沢駅の電車内で気絶し降車して駅長室で家族の迎えを待ったことが一度ならず経堂駅でもあった。私はオペラ稽古時の辛さと苦しみを誰にも、母にも言うことは決してなかったが、毎食事の席を早く退出するなど必死に自主トレをしている私を見て、母には状態は解っていたのだろう。特に声をかけることは無く、その期間は隠れてお茶を絶つなど…祈りつつ共に居てくれたことを、当時の私は全く気づかなか

った。護られているとは知らず安心してのびのびと思うままに演奏に没入していた。毎本番時に楽屋で頂く母手作りのおにぎりはリボンで可愛く閉じられていた。

その母に真正面から「ありがとう」と感謝を言ったのは、昨年3月に帰天する直前だったことを心から悔やんでいる。桐朋音大生時、蝶々夫人の着付けをしてくれた母を見て演出の先生はつくづく「いーいお母さんだね〜」とおっしゃったのを折に触れて思い出している。

演出家から徹底的に厳しく鍛えられ、その度に、思い切って！の演技に挑戦してOKをもらう自己超越体験、指揮者との徹底した楽譜を通しての音楽共有の体験は、『サントリー音楽賞』受賞という成果に繋がった。

授賞理由は以下のとおりである。

『豊田さんの受賞は、オペラ、オラトリオ、コンサートなどにおいて今日の音楽家としての新鮮な感覚をもった存在を示した、その目覚ましい活躍によるものです。特に贈賞理由としては、①昨年9月1、2日の日生劇場におけるオペラ<コシファン・トゥッテ>（モーツァルト）でのデスピーナ役、②同9月25日に上演されたオペラ<ホフマン物語>（オッフエンバック）で、日本人としてはじめてオリンピア、アントニア、ジュリエッタとステルラの4役を受け持ち見事に演じ分けたこと、③第114回「毎日ゾリステン」（同11月28日）として行なった初のリサイタル、同11月9日の「プロムジカ合唱団」定期の小泉和裕指揮による<天地創造>（ハイドン）などでの知的で端正な歌唱表現があげられています。』

サントリー音楽賞ホームページより

上記デスピーナは、思い切って！ちょい悪女の演技に挑戦し続けた。公演ではポイントの所作ごとに聴衆がワーッと湧いて受けるので驚いた。演出家（鈴木敬介）の面目躍如と思う。

ホフマン物語（指揮：小澤征爾、演出：鈴木敬介）の音楽には4役（女優、人形、肺病で歌手志望の娘、娼婦）の表現が在るが、演技は歌手

に任されている。それまでの出会いによる学習体験の蓄積があってこそ演ずることができたことは間違いない。

授賞決定を聞いた瞬間に音楽の恩師、演出、指揮、共演者、舞台スタッフ、企画の一人おひとりのお顔が走馬灯のように浮かび、一緒に頂いた賞なのだという実感と感謝で胸が爆発しそうになったのを覚えている。33才の春だった。

授賞式でサントリー会長・佐治敬三氏から頂いた「21世紀において音楽の多様な可能性を切り開くであろうことを期待している。」とのお言葉は、通奏低音のように心に鳴り続けている。

『師』と出会わせくださり成長の体験をお与えくださる大いなる導きに感謝している。

マエストロ小澤征爾との出会いは30才時のコンサートで、ベートヴェン《ミサ・ソレムニス/新日本フィルハーモニー/東京カテドラルカトリック教会》である。この小澤先生との最初の演奏体験で、音楽家としての精神的基盤が叩きこまれた。次号に記させて頂きたい。

オペラでの共演はシェーンベルク作曲モノオペラ《期待》、ベルク作曲《ヴォツェック/マリイ》、オッフエンバッハ作曲《ホフマン物語/4役》、ヴェルディ作曲《ファルスタッフ/ナンネッタ》他である。

ナンネッタの恋人役フェントンは高丈二氏であった。高氏はスターテノールとして輝いておられ、共演は楽しみで光栄に思っていた。ナンネッタを歌う時には、既に高丈二氏とはロジャーと伯爵で共演させて頂いていた。同じ舞台を踏ませて頂いて学んだことは、品格在ることの尊さだった。持って生まれた資質というものの上にオペラ歌手としての技量が舞台上に花開く素晴らしさを共演して知った。

本研究会の沖縄県立芸大関係の役員のほとんどは高丈二先生の指導を、直接、間接に受けている。時期が来たら那覇の研究会での公開レッスンを、一同希望している。

声楽家の軌跡は、近年、教育家としての道にしっかりとつながった。沖縄県立芸術大学赴任体験は、私の大学院時代からの研究テーマである『芸術創造研究』が人材教育と合体し、多くの気づきと成果を与えてくれた。

現在は東京大学教養学部『芸術創造連携研究機構』の1つの授業、身体運動科学者・工藤和俊先生との『楽器としての身体：声楽の実践と科学』につながっている。授業で学生さんに接し、総合大学における芸術創造体験の場の存在意義を深く感じている。『芸術創造体験』とは何か？それは一言で言えば『自己超越体験』であると考えている。

芸術と教育を結ぶことによる人材教育の成果は既に世界的に注目され、今後、益々研究が盛んになると思うにつれ、『美感遊創』を謳う、佐治敬三氏の「音楽の多様な可能性」について、思い巡らせている。

(本会 代表理事)



サントリー音楽賞授賞式（1984年、東京会館）
左から、佐治敬三氏・筆者・筆者の母・豊田喜久子